

「原子炉格納容器が破損するのを防ぐため、東電はきょう未明から、蒸気を外部に放出する作業を進めているということだ」

3・11から一夜明けた12日朝。キャスターが淡々と伝えるニュースに、浦部農園(藤岡市)園主、浦部修(61)は全身の血の気が引い



第4部・有機とともに

ていくのが分かった。「水蒸気?」。チエルノブイリ原発事故の記憶をたどった。「(炉心が)溶けてるんじゃないのか」。妻の真弓(61)は研修生に電話。「作業はしばらく中止。外出も控えるように」

「溶融」を伝えていた。知恵出し合う

震災から10日後の21日夜。夫妻は農園の事務所に従業員と研修生、独立した元研修生を集めた。「これから何が起こり、何をすべきか。知恵を出し合おう」

した。旧ソ連時代にチエルノブイリの被害を受けたウクライナが幾度かの変遷を経て設定した、世界で最も厳しい食品の放射性物質の規制値だった。「パンのウクライナ基準が20倍。コメは、これを超えたら売らない」と修。国内のコメの暫定基準値は500倍(当時)だ。検査の結果、20倍以上500倍以

安全安心を未来へ

や人体への影響を説明。自宅待機中に調べた農産物への移行率も紹介した。「シヤガイモを植えてもいいでしょうか」。不安がる研修生OBを、修は「植えなさい。植えなさい何も分からな

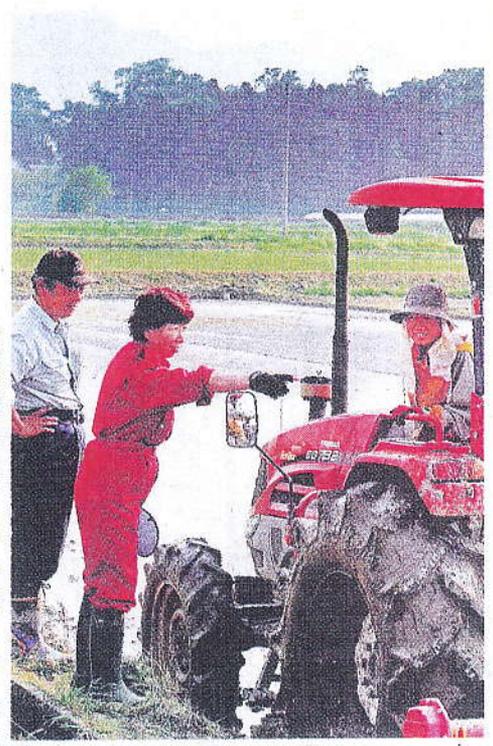
下だった場合、売れない上に補償の対象とならない可能性がある。「それでいきましよう」。鈴木が同調すると、全員が大きくうなずいた。

厳格検査に意義

それでも夫妻は、厳格な検査をしたことに意義があったと考えている。砂状質の土壌は粘土質よりも放射

管した。コメは全品目から放射性物質は検出されなかつたが、結果的に注文量は風評で大きく落ち込んだ。

5月17日、農園の田に水が入った。害虫を捕食する子守り蜘蛛が、今年も畦を走り回っている。(敬称略)



苗場用に水を入れた田で研修生を指導する浦部夫妻。「未来のために」、今年も有機のコメ作りが始まる

メッセージ

この連載の感想や、農業をめぐる問題について意見をお寄せください。(ファクス027・251・43334 メールseiji@rajin.com)

第5部「農あればこそ」を6月に掲載します。